

Hello, Kids!

特集:新「学習指導要領」を読み解く



茨城県古河市立
古河第二小学校
渡邊治子先生



1年生から
買い物活動に参加し、
品物や数を自分で
決めて、英語で楽しく
コミュニケーションを
図っています。



トピックごとに
親しみやすい
掲示を工夫して
います。

巻頭言 新「小学校学習指導要領」を読む

白畑知彦(静岡大学教授).....2

実践報告 教育特区・石川県金沢市での取り組み

本間啓子(石川県金沢市立杜の里小学校教諭).....4

教育特区・群馬県大泉町での取り組み

群馬県邑楽郡大泉町小学校英語指導担当(JTE).....6

Hooray ALT!

Christopher Kato(千葉県我孫子市ALT).....8

Say "Hello" with Alison!

根本アリソン(福島県双葉郡大熊町 外国人英語講師).....8

新「小学校学習指導要領」を読む

2008(平成20)年2月15日、文部科学省から新しい学習指導要領案が公表された。この案は、その後数週間、国民からの意見(パブリックコメント)を受け、同年3月28日、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領および中学校学習指導要領の改訂として告示され、各教育委員会等に改正通知が発出された。今回の新学習指導要領の完全実施は、小学校では2011(平成23)年度からであるが、移行可能な部分は、ある程度前倒しで行うこともできるようで、早ければ平成21年度あたりから『英語ノート』などを使用して「外国語活動」を開始する学校が出てくる可能性もある。本稿では「小学校での外国語(英語)活動」に関連する箇所を中心に新学習指導要領について俯瞰し、若干の私見を述べることにする。

まず、新学習指導要領全般について。基本的な理念は、「生きる力をはぐくむこと」である。「生きる力」の重視は、現行の学習指導要領を踏襲しており、この点において、今後も日本の教育の基本理念は変わらないということだ。また、小学校6年間での標準授業時間数が、5,367時間から5,645時間となり、278時間増となった。近年の子どもたちの学力低下は、「ゆとり教育」と称された授業時間数の減少、教科内容の削減のためだと考える人たちが市井では少なからずいる。しかし、文部科学省は、この授業時間増は詰め込み教育への転換を意味するのではなく、じっくりと学習に取り組める時間の確保が主眼であり、基礎的・基本的な知識・技能の習得と、思考力・判断力・表現力などをはぐくむことを目的としていて、「ゆとり教育」を否定するものではないと述べている。以上、新学習指導要領の特色(の一部)をあげたが、以下では「外国語活動」について見ていきたい。

予想通り、今回の改訂で「外国語活動」が必修化された。5,6年生に対し、週1時間、年間35時間が「外国語活動」

の時間にあてられる。ただし、「外国語」とはいても、新学習指導要領には、「外国語活動においては、英語を取扱うことを原則とすること」と記載されており、たいいていの学校はこれを遵守し、英語活動を行うことになる。

なぜ小学校高学年段階で外国語活動を必修化したのか。文部科学省はそのホームページで次のように答えている。すなわち、「現在、多くの小学校で、総合的な学習の時間等を活用して外国語活動が行われているが、取組内容にはばらつきがある。このため、教育の機会均等や中学校との接続の観点から、小学校高学年で、『外国語活動』を週1コマ程度行うことにした。」

これだけでは外国語活動必修化の説明としては説得力に欠けるとは思われるが、確かに、小学校での英語活動の中身がここ数年混沌としてきていることは否めない。様々な「小学校英語教育正当論」が乱立し始め、そのような動きに対して、国(文部科学省)の方から早めに歯止めをかける必要性が生じてきている。外国語活動で扱う内容に関して、ある程度の統一性が必要となったのは確かである。

さて、小学校の新学習指導要領では第4章が「外国語活動」の章である。本章は「第1 目標」「第2 内容」「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」から構成されている。そして、「第1 目標」の欄に述べられている以下の内容が「外国語活動」の根幹となる。

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」

静岡大学教授 白畑 知彦



最も重要な箇所は「コミュニケーション能力の素地を養う」であろう。言語能力を育成することが主目的ではない、ということなのだ。この「目標」には「コミュニケーション」という言葉が2度出てくる。また、新学習指導要領の他の箇所にも何度も「コミュニケーション」が使用されている。コミュニケーションとは、すなわち、言葉・文字・身振りなどによって、私たちの意思・感情・思考・情報などを伝達・交換することであるが、そのような能力の素地を養うことを重要視しているのである。それが今度は中学校に進めば「コミュニケーション能力の基礎を養う」学習へとなるのである。

次に、「第2 内容」であるが、ここでは2つの大きなテーマが掲げられている。それは、「1. 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができる」と、「2. 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができる」ことである。外国の文化だけではなく、日本語(国語)や日本の文化についても併せて理解を深めることが大事だと述べている。しかし、自文化・他文化の理解・受容は、外国語活動の時間だけで完結できるものではない。したがって、他の教科、たとえば「国語科」「音楽科」「図画工作科」などの学習事項と関連させることが示唆されている。

次の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」が、第4章全体の3分の2を占める。ここには、「① 言語や文化については体験的な理解を図ること」「② 指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になったりしないようにすること」「③ アルファベットなどの文字や単語の取扱いは、子どもたちの学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」、そして「④ ジェスチャーなどのノンバーバル・コミュニケーションも取り上げていくこと」などが列挙されている。

外国語活動の担当者については、指導計画の作成や授業の実施は学級担任や外国語活動を担当する教師が行い、

実際の授業にあたっては、ネイティブ・スピーカーや地域人材の協力を得てもよいとなっているが、「外国語活動」が間違った方向に行かないためにも、文部科学省が主催する教員研修が今後をもっと多く開催されることを強く望む。

以上が「第4章 外国語活動」の大筋である。前述もしたが、外国語(英語)活動の目的は、英語の技能を教え込むのではなく、聞くこと、話すことを中心としたコミュニケーション活動を通して、自国・他国の文化や人々を理解し、文法的な言い間違いを恐れず、英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を養成することである。

筆者は、今はひとまず、この程度の英語学習の導入でスタートするのがよいと思う。いや、今回の導入でさえも、随分と戸惑いを隠せない先生方が大勢いらっしゃるはずである。全国の小学校で実施するということは、塾や会話学校で英語を勉強するのは状況が根本的に異なる。私塾はいつでもやめられるが、学校はそうはいかない。様々な背景を持つ子どもたちが同じ教室で勉強するのである。彼らには嫌になったらやめるという選択肢はない。外国語活動を首尾よく指導できる教師の育成はこれからの最重要課題である。以上の現況を鑑みると、今回の緩やかな英語導入は次へのステップを考えるうえでの模索期間とすべきである。

さらに、教える側はビンゴなどのゲーム活動をやること自体がコミュニケーション活動に直接結びつくのではないことを十分に念頭に置くべきである。問題はその中身である。ビンゴゲームが子どもたちの異文化理解に本当に貢献するのか、もう一度考える必要がある。また、教師は本当の意味でのコミュニケーション場面を子どもたちのために設定しているのかどうか、この点についても、もう一度吟味してみる必要がある。

教育特区 石川県金沢市での取り組み

1. はじめに

金沢市では、平成16年度から「世界都市金沢小中一貫英語教育特区」の認定を受け、中学校との連携を図った英語科の授業を小学校3年生以上で行っています。授業は、学級担任と市が採用した英語指導講師やインストラクターによる週1時間のチームティーチングの他に、学級担任単独による15分程度の復習を中心としたショートタイム授業を行っています。3年生から5年生までは金沢市が独自に作成した小学校英語副読本を主たる教材として使用し、6年生からは中学校1年生用教科書の一部を使って学習しています。小中学校に一貫した英語教育のカリキュラム編成や副読本については、平成8年度にすべての市立小学校に導入された英語活動の実践成果や、小中一貫英語教育推進地域(市の指定研究)の研究成果等がもとになっています。中学校につながる「実践的なコミュニケーション能力の基礎」を身に付けた児童の育成を目指し、他教科と同様に、学習課題を明確にした授業展開と評価を活かした英語の授業に取り組んでいます。

2. 本校5年生での取り組みについて

(1) ふだんの授業の中で

児童の知的興味を刺激するような「聞きたくなる・話したくなる」場面設定(活動)を大切に授業作りをしています。単元計画の段階で、自分の思いや考えを伝え合うコミュニケーション活動を工夫するために児童をよく知る学級担任が積極的に関わり、見通しを持った指導を心がけています。

(2) 教室から一歩出て

さらにクラスだけでなく、教室から一歩外に出て、全校児童へコミュニケーション活動を広げた取り組みも行ってきました。副読本にある“Which do you like, ~ or ~?”の表現を使って、「人気のある動物を児童会マスコット案として児童議会に提案しよう」と全校児童に好きな動物をインタビューしたのです。その意欲的なインタビューの様子は

下級生にとっても、上級生たちが自分たちのよい学習者モデルとして見えたようです。各クラスの先生にも関わっていただいたことで、児童も自信がついたようでした。

次の授業では、インタビュー結果を“How many students ~?”と聞き合いました。16にも及ぶ多くのグループの結果を児童が集中して聞き続けることができたことには驚きました。また、クラス内でも学習ペアのよい関わりが見られました。

(3) 総合的な学習の時間でも

総合的な学習の時間に、近隣の大学で学ぶ留学生を招き、児童が学習している環境問題について母国の取り組みを紹介してもらいました。プレゼンテーションソフトの写真や図が理解のヒントとなり、45分間英語を聞き続けることができました。その後、一人ひとり名刺を渡しながら自己紹介をする時間を設けたことで、次のような英語学習への意欲につながりました。

児童の感想より

少し英語がわからなかったのですが、もっと英語やいろんな国の言葉を覚えてゲストの言っていることを聞き取り、いろんな外国の果物や動物、ほ乳類のことを知りたいです。ゲストとあく手ができてうれしかったです。

(4) 体育科でも

サッカーの授業にも留学生に参加してもらいました。技術指導では、わからない単語があっても、動きが児童の理解を助けてくれたようです。



(5) 来校者に学校案内

一年間の学びのまとめとして、実際に英語でお客さんに学校案内をしました。班ごとにゲストの方とお互いのことを



質問したり、質問されたりしながら校内をまわります。最初は、緊張し、英語で聞かれても困惑している感じでしたが、戻ってきたときには、とても明るい表情でした。

児童の感想より

私は、お客さんと一緒に英語で話して歩いているとすごくはやく時間が過ぎていきました。でも、いろいろなことを話してとっても楽しかったです。それになかよくなれてうれしかったです。最後に進んで質問できたのでよかったです。あと、自己紹介をするときに自分のことをしっかりと話せたのでよかったです。お客さんが、アイコンタクトでにっこり笑顔で話してくれてうれしかったです。だから、私も見習いたいなあと思いました。

(6)文字でも本当のコミュニケーション体験

高学年は、小学校英語から中学校英語への連携において重要な時期です。音声言語だけでは不安になる子、文字への知的好奇心の高い子がいる一方で、文字が出てきただけで苦手意識を持つ子もいます。少数の子だけではなく全員の意欲につながるように、「文字に慣れ親しむこと(段階的な文字指導の導入)」が中学校英語への関心・意欲・態度をつなぎ、「書く力」の伸びにつながると考え、文字指導は特に教材を工夫しながら実践してきました。

文字を介しての学習も、音声と同じく「読みたくなる・書きたくなる」意味のあるコミュニケーション体験を工夫してきました。その1つが中国大連市の小学生との英語での文通です。年賀状を送り、返事を受け取りました。その返事に自己紹介を書きました。



児童の感想より

最後に先生がバッグに何かを入れていました。それが大連の子の手紙だと知ってビックリしました。その手紙を見てみました。はじめに「Dear ○○」と書いてあって、家に帰ってお母さんに読んでもらったら、「これからお手紙相手になろうよ!」とか書いてあって、すごくうれしかったです。かわいい絵も描いてありました。また、返事をはやく書きたいです。

3. 最後に

授業や授業以外の場面でも英語による意味のあるコミュニケーション体験を通して、英語を使ったコミュニケーションへの抵抗をなくすと同時に、児童同士の関わりを深めることができました。さらに、外国の方との英語を使った交流体験は、英語学習の必要感や関心・意欲を高めることにもつながりました。

副読本の使用が最終となる5年生では、3年生からの既習の基本的な語や文を読むことができるように、何度も聞かせる工夫と読む時間を設定してきました。たとえば、単語1語ずつを見て意味がわかり、読むことができるように、フラッシュカードを使っての指導も行ってきました。

聞く、話すといったコミュニケーション活動の体験とともに、文字を介しての確かな英語の力も身に付けさせたいと願い、授業に取り組んできました。その成果や課題を検証する手立てとして児童に意識アンケートを行いました。その中で、学級開きの頃は「英語の授業が楽しい」と回答した児童が84%であったのが、年度末には97%に向上しました。

新しい時代を担う児童たちにとって、英語学習はとても重要な教科の1つであると思います。今後も、このような児童の高い期待と意欲に応えることができるよう取り組んでいきたいと思っています。

教育特区 群馬県大泉町での取り組み

1. はじめに

群馬県大泉町では、平成17年度より英語教育特区として、「英語に触れる、慣れる、親しむ」を目標に「聞く・話す」活動を中心に小学校で英語を教科として実践しています。年間の授業時間は、1年生では20時間、2年生から6年生までは35時間となっています。町内の4つの小学校には、それぞれJTE(小学校英語指導担当)、ALTが常駐し、学級担任とのチームティーチングで授業を進め、3か年が経過しました。

2. 3人のチームティーチング

1つの授業に3人の教師という恵まれた環境とはいえ、初めはそれぞれの教師に戸惑いも多く、役割分担が確立するまでには苦労がありました。

小学校英語を専門に扱うJTEがいる利点は、スキル面での児童の成長を見据え、6年間を見通した計画を立てることができること、英語の専門的な知識を生かしながら授業作りができること、授業中における正確な音声指導ができることなどです。また、日頃児童と関わっている学級担任は、児童の実態を的確に把握しています。授業の展開案を作るには、個々の児童の性格や人間関係を熟知している学級担任の意見が重要です。学級担任は多忙で、授業前にJTEやALTとの細やかな共通理解を図る時間を確保することはどの学校でも課題になっていると思います。大泉町ではJTEが展開案に学級担任の動きを書くなどの工夫をして対応しています。学級担任に使用してほしい英語表現なども具体的に書くことにより、活動しやすくなりました。学級担任が英語を使用することが児童にとっては大きな興味付けになっています。

実践の相手となるALTの存在は欠かせません。授業内容はJTEが中心に計画を立てますが、ネイティブスピーカーであるALTの意見やアドバイスはとても参考になります。授業だけでなく、休み時間に絵本の読み聞かせをした

り、給食時の放送でDJを務めたりと、児童が多くの英語に触れる工夫をしている学校もあります。

3. 楽しくなければ意味がない、楽しいだけでも意味がない

初年度は「とにかく英語嫌いを作らない」を合言葉に、4つの小学校のJTE(4人)が頻繁に会議を行い、多くの「楽しい」ゲームや活動を考えました。その結果、年に2回行われるアンケート調査では、常に90%を超える児童が「英語の時間は楽しい」と回答し、授業を心待ちにする姿も見られるようになりました。

しかし、一口に「楽しい」と言っても、ゲームが楽しいだけでは意味がありません。本当の意味で英語を使えたという達成感をもてるような活動が必要になってきました。「ALTに日本文化を紹介する」「海外の学校と交流する」などの案も出ましたが、テーマがあまり大きいと、児童の英語力では、活動に取り組むことができません。

そこで、各校のJTEと学級担任が児童のコミュニケーション力や興味の実態を踏まえ、より適切な活動が行えるように、取り扱う内容を厳選し、基本文型と必修単語に絞りました。活動内容は同じでも、各校・学年の実態に応じて教材や教え方を少しずつ変えることにより、他教科や学校行事との関連も図りやすくなりました。

一方で、基本文型の定着についても工夫を試みました。ALTの言葉をくり返させるだけではなく、児童の記憶に残りやすい歌や、英語のリズムに慣れるためのチャンツ、実際の使用場面に近い状況が作れるゲームなどをバランスよく用いて、児童が無意識のうちに表現を覚えられるように工夫しました。主語・動詞・目的語などを部分的に入れ替えて自らの考えを伝え合う楽しみを持たせることで、飽きることなく学習できるようになりました。

英語を覚えること自体は目標ではなく、あくまでもコミュニケーション活動を楽しむための手段ですので、決して強



平成19年度大泉町 小学校英語指導担当(JTE)

清水 美希

鈴木 佐知子

富福 ちひろ

宇野 寛美

制的に覚えさせることのないようにしました。結果として、児童に「出会ったことのある英語」が蓄積され、既習の表現を活用してより豊かな表現ができるようになってきました。また、「ある程度の教室英語は瞬時に理解して動ける」、「教師の英語による説明をじっくり聞き、動作や表情などの視覚的な情報と合わせて類推できる」などの力がつき、「見る、聞く、行動する」といった態度の面でも成長が見られました。

この力を下地として各校の実態に合わせ、それぞれの学年の発達段階と英語力に応じた体験や発表などの発展活動を行うようにしました。2年生の「ALTの先生をあんないしよう」(学校案内)、5年生の「ALTの先生に料理を習おう・教えよう」(料理)などが、複数の学校で取り組まれている活動例です。ハロウィーンなどの行事に合わせて全校集会を行い、全児童がそれに向けて学習や準備を進め、学年の枠を越えて交流する時間を設けている学校もあります。高学年の児童には、各校にて4校のALT・JTE合同授業を行い、国籍や年齢の異なる大勢の教師と交流を楽しむ機会を作りました。学んだ英語が様々な国の人に確かに通じるといふ、大きな自信に繋がっています。

今後も、より有効な授業を目指して、展開案の加除・修正を行っていきます。



4. 成果と児童の変容

ALTは授業だけでなく、給食や清掃、クラブ活動、学校行事なども児童と共にします。日常的にALTと触れ合うことで、ほとんどの児童がALTと話すことに抵抗を感じず、

英語独特の音や抑揚も無理なく受け入れています。

また、大泉町の小学校にはブラジル、ペルーなどの外国籍児童の割合が高いのですが、英語の授業は日本人児童と外国籍児童が同じスタート地点に立って楽しめる機会でもあります。日頃日本語に苦戦している外国籍児童も、英語となれば「ハンデなし」。ALTの話の後に「ぼくの国ではね・・・」と紹介してくれたり、アルファベットを扱うときは率先して先生役になったり、大活躍しています。英語を通して児童の間で小さな国際理解が進んでいるのだと思います。

3年間で児童が大きく変わったのは、「わからない」「言えない」「つまらない」と言い出す前に、「わからないかもしれないけれど、聞いてみよう」「通じないかもしれないけれど、言ってみよう」「楽しくやるために、先生に注意される前に自分たちで気をつけよう」という姿勢を見せるようになったことです。それは、児童がゲームの説明を辛抱強く聞いたり、何とかALTに訴えようと頑張ったり、ゲームや活動を楽しむために協力したり注意し合ったりして、「わかった」「伝わった」「楽しかった」という成果を得てきた証だと思います。児童が自ら育んだ姿勢は、人間関係を築いていく力の土台の一部になっていると思います。

5. 今後の課題

大泉町では「聞くこと・話すこと」を中心に小学校英語を進めてきましたが、3年間の中で児童はアルファベットや和英辞典を扱う活動に興味を持ちはじめ、文字への関心が高まりつつあります。今後、「読むこと・書くこと」の指導をどのように扱っていくのか、町で行っている英語科企画委員会(小中学校の英語主任、JTEで組織)で、小中学校の英語教育の連携をさらに進めることが課題となっています。

Howay ALT!

■(1)「た」のしい

In the last issue, I suggested the “three 「た」s” for good lessons.

(1)「た」のしい, (2)「た」めになる, (3)はっ「た」つ
段階に合っている

This time, I will discuss the first 「た」 in detail. I think most agree that lessons that are fun are memorable. Chances are that if the lesson is memorable because it was interesting, the material that was presented during that lesson will also stick with the students.

One way to make lessons more fun is to build activities around students’ interests. It takes a lot of “studying” to learn the names of the cartoon characters the students like, the shows and *talents* they watch on TV and the music they listen to but using those things makes pattern practice much more interesting and in turn memorable.

Also, I have found that students enjoy activities that allow them to move around and have a short conversation with their friends. Giving them something to hold (cards, dice, small balls, etc.) also increases motivation and interest. A fun and interesting class helps students remember the target language.



Christopher Kato
(千葉県我孫子市ALT)



Say “Hello” with Alison!

根本 アリソン

イギリス出身・1989年より福島県で英語講師として活躍中

■イギリスの夏の味～Summer in the U.K.～

夏の行事は5月1日のメーデー(May Day)からスタートします。長い冬が終わって暖かくなり、花や木が生長します。昔から、この時期はロマンスや愛の季節とも言われ、女の子はその日の朝露で顔を洗うと1年間きれいになると信じられてきました。メーデーには伝統的なメイポール踊りを行う地域もたくさんあります。子どもたちが木の幹を中心に幹の上に取り付けられたたくさんのリボンを持って踊ると、リボンがきれいな模様に編まれていきます。

6月には、エリザベス女王の誕生日を祝うパレード(Trooping the Colour)がロンドンで行われます。イギリスには国を祝う日がないため、この日は一大イベントです。毎年、エリザベス女王をはじめとするロイヤルファミリーがすてきな衣装を身に付け、赤や黄色の色鮮やかなユニフォームを着た1,000人以上の兵士のパレードや英国空軍の儀礼飛行があります。

もう一つの夏のイベントは、日本でもよく知られているウィンブルドン選手権です。テニスの四大国際大会の一つで、中でも一番古い歴史があります。毎年6月末から7月初めに行われ、男子の決勝戦は、いつもイギリスの高校の卒業式の日に当たります。ウィンブルドン選手権の楽しみは試合のほかにもあります。それは、甘い生クリームがかかったいちごを食べることです。イギリス国産のいちごは5月から9月までしか食べられません。ウィンブルドンでは毎年、およそ27,000キロのいちごと7,000リットルの生クリームが使われています。いちごはウィンブルドン選手権に欠かせない存在であり、イギリスの夏の味の代表です。

(福島県双葉郡大熊町 外国人英語講師)

小学校英語情報誌

Hello, Kids!

Vol.2-2 (通巻6号)

定価120円(本体114円)
送料80円

平成20年6月10日印刷 平成20年6月16日発行(年4回発行) 編集兼発行人 山岸 忠雄

印刷所 株式会社興陽社 〒113-0024 東京都文京区西片1-17-8

発行所 開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1

☎03(5684)6121(営業)、(5684)6118(販売)、(5684)6115(編集) <http://www.kairyudo.co.jp>



開隆堂出版株式会社

〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03(5684)6111

北海道支社	〒060-0061	札幌市中央区南一条西6-11	札幌北辰ビル8階	☎011(231)0403
東北支社	〒983-0043	仙台市宮城野区萩野町1-11-1	萩野町Mビル2階	☎022(782)8511
名古屋支社	〒464-0802	名古屋千種区星が丘元町14-4	星ヶ丘プラザビル6階	☎052(789)1741
大阪支社	〒550-0013	大阪市西区新町2-1-0	16	☎06(6531)5782
九州支社	〒810-0075	福岡市中央区港2-1-5	F Y Cビル3階	☎092(733)0174